機関リポジトリ

村上祐子
東北大学

機関リポジトリ 5W1H

- What: 情報サービスインフラ
- For what: 所属員の学術活動支援
- Who: 学術機関
- With whom: ？
- Where: online
- How: ハーベスト可能なメタデータを提供

学術情報流通（生産側）

学術活動

成果

産業的価値なし
学術的価値あり

論文執筆

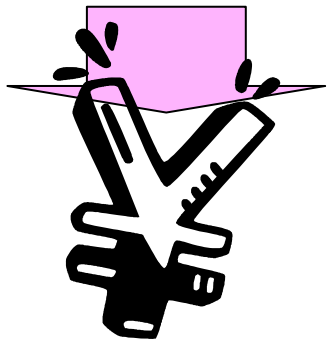
投稿・査読プロセス

査読

研究分野によって
プロセスはさまざま。

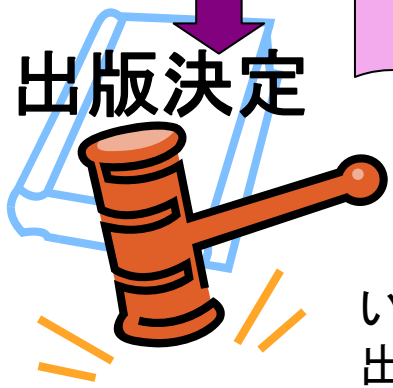
産業的価値あり

知財（特許）
申請検討



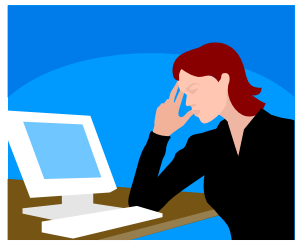
申請却下

出版決定

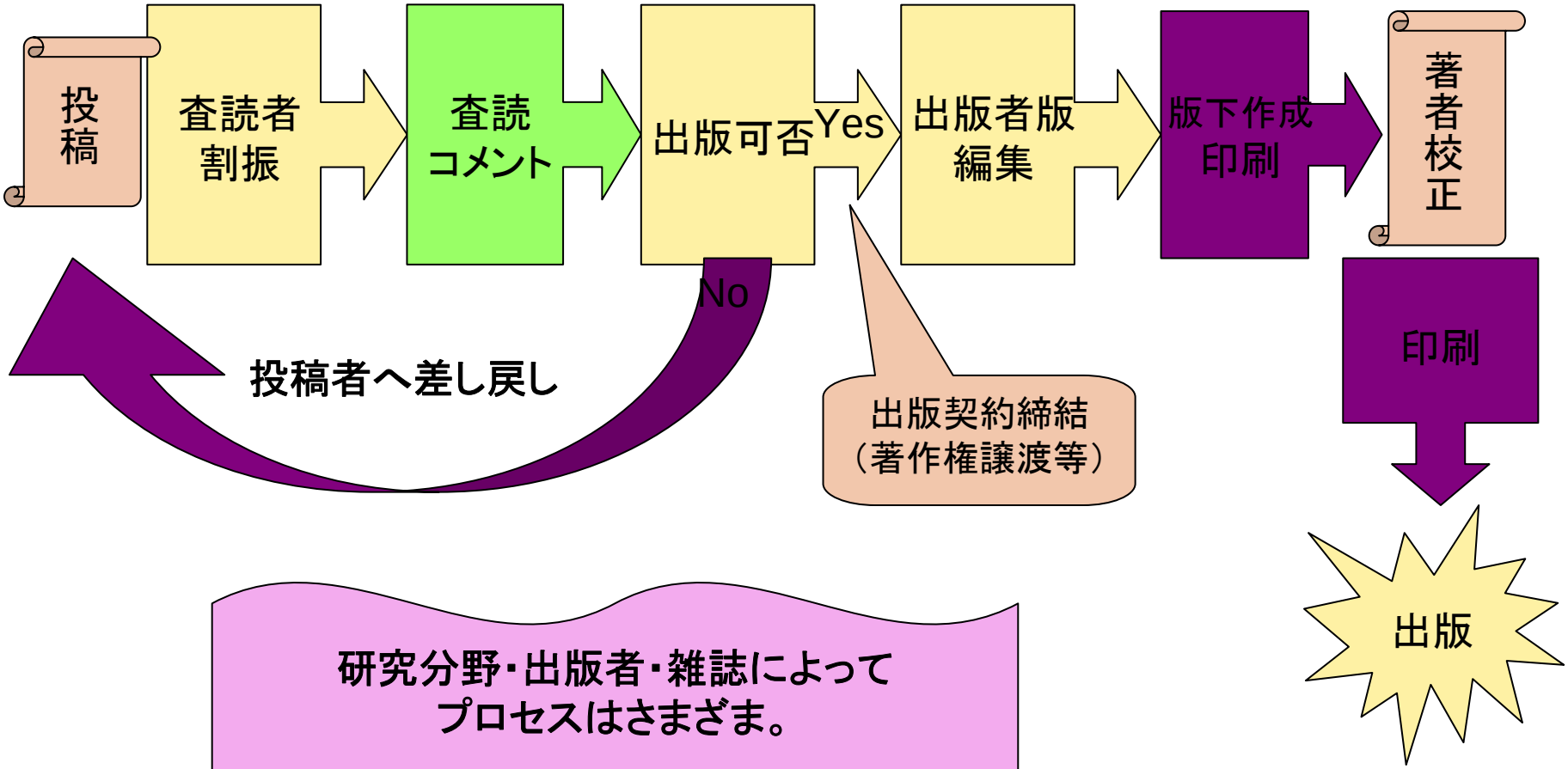


ひたすら待つ
あるいは受理

いつの間にか
出ている



査読から出版まで

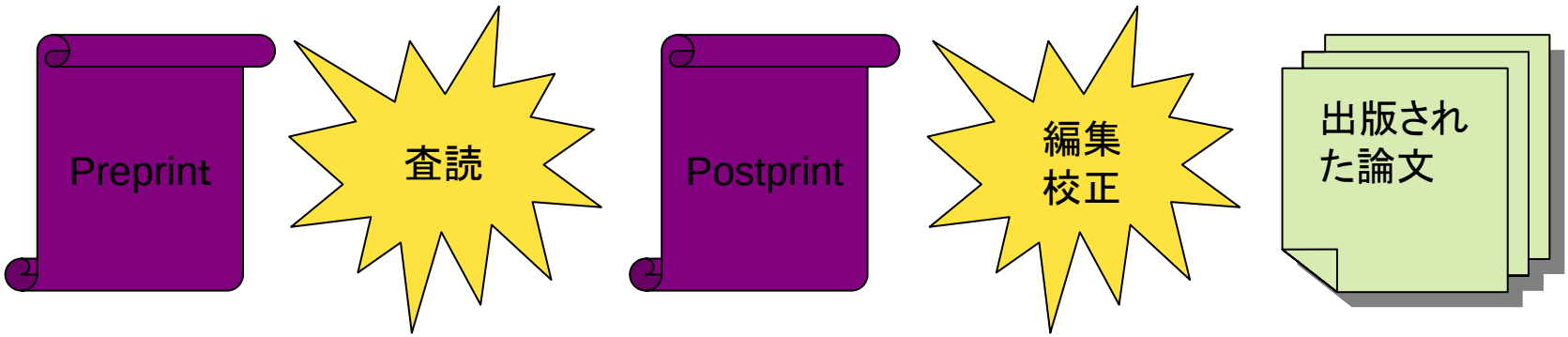


研究分野・出版者・雑誌によって
プロセスはさまざま。

全部電子システム上～原則全部紙

Preprint交換文化

- 1974- プレプリントサーバ:分野別
  - 数学
  - 高エネルギー物理学
  - 経済学
- 1999　サンタフェ universal preprint service
  - OAIに発展



紀要交換文化

- かつては世界的な学術成果発表形態
- 学科・学部レベルでの出版
  - 研究者の「同人誌」のようなもの
  - 査読のある紀要もある
- 紀要同士を「交換」することで流通

交換文化には「ビジネス」の余地なし

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%82%B9

商業出版者の参入

科学技術
投資増大

研究者数
増大

成果発表
圧力増大

出版数
増大

手間暇
増大

ビジネス
チャンス

購読料
モデル

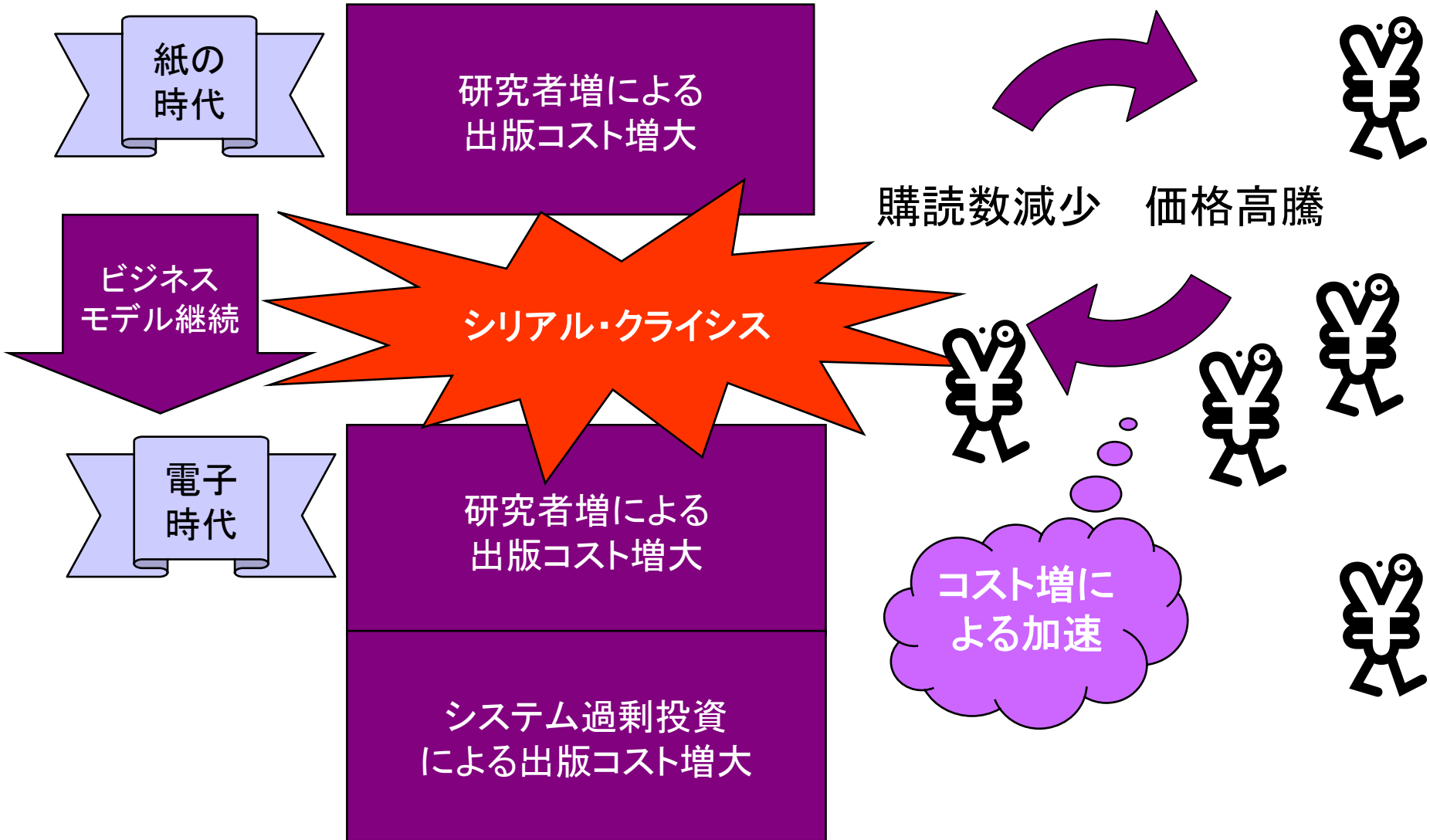
Publish
Or
Perish

研究者の片手間では
もはや流通まで
手が回らない

背景

科学の職業化
国家的科学振興
巨大科学へのシフト

購読料モデル：価格＝コスト/購読数



オープン・アクセス

- 動機
  - オンラインならそもそも出版コストはただ同然
  - 研究者がコストを負担するのは学術出版の本来の姿にもとる

- ネットワーク・コストは転嫁済
  - 商業出版者はただ乗り
- 「査読・編集コスト」
  - 査読料はない（研究者のボランティア）
  - 出版プラットフォーム貸しをしているなら、学会＝研究者集団からシステム・コスト回収済のはず

ピア・レビューと編集

- 品質保証
  - 研究内容の適切さの保証
  - 伝達手段（としての言語表現・図表・データ）の適切さの保証
  - 電子的伝達手段の最適化保証
- タコつぼ化、機能不全との指摘有。
- 初期オープン・アクセス思想はピア・レビューに品質保証を一任する前提。＜要修正

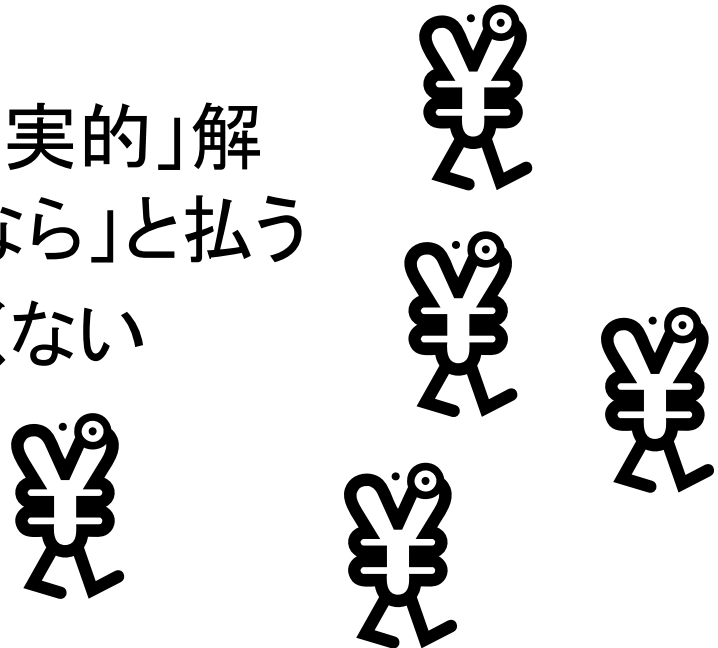
編集の重要性とビジネスモデル

- 編集者の人件費はなくならない…むしろ増加傾向
  - 日本：構造変化によるボランティア・ワーカー（＝徒弟制）の消滅
  - 海外：高度知識を持つ編集者（海外学術誌では博士取得者がほとんど）の必然的増加
- すなわち狭義オープン・アクセスが前提としている編集出版コストゼロは現実には成立していない。
- オープン・アクセスビジネスモデルが必要。

オープン・アクセス

- コストがあるとすれば誰が負担？
  →著者・所属機関・研究助成機関

1. OA著者投稿料モデル
2. OAハイブリッド：割高な投稿料を払えばOAと出来る
   - 商業出版社でも認める「現実的」解
   - 「OAで被引用数があがるなら」と払う
   - 手が出ない研究者も少なくない
   - Big dealの対象となる



出版料モデル

著者投稿料モデル
研究者による
出版コスト負担

出版料支払いによって
著者版の論文を
セルフアーカイブ
してもよい
契約にする

手が出ない
研究者も

研究者の所属機関
による出版コスト負担

出版料の包括契約など。
IR出版もこの一環。

紀要出版による
学術情報流通支援
の延長線

研究助成機関
による出版コスト負担

納税者への情報公開責
任を助成機関そのものが
サポート：法制化ケースも。

研究助成期間と
出版のタイミングが
合うとは限らない

「学術活動」の範囲

- 大学の活動は学術活動か?
  - 研究：研究内容の研究による再生産
  - 教育：研究内容・手法の伝達による人材育成
  - 教育研究支援
  - 研究・教育・教育研究支援（活動）の研究・教育

教務資料

- 大学院英語コース入試要項
- 12月IR搭載後アクセス急増→問合殺到（アフリカ、インド）
- 東北大学リポジトリでのDLランキング上位
- 志願者増との関連は不明

年月	DLランキング	学外	学内
Dec-08	1	2066	3
Jan-09	1	852	8
Feb-09	2	200	0
Mar-09	3	142	1
Apr-09	7	80	1
May-09	3	84	0
Jun-09	13	78	1
Jul-09	8	95	1
Aug-09	13	72	0
Sep-09	6	11	1

文脈の両極

- オープン・アクセス：狭義の学術文献（査読済み学術誌論文）
- CMS：なんでもあり。灰色文献、working draft、データ、プログラム
  - **原則的無節操の原則**. Principle of principled promiscuity. 日本発の機関リポジトリ思想. 機関リポジトリには何でも入れる。何をどう使うかは利用者が決める。

アメリカの例：CMSより

- なんでも大学図書館がホスト（有料サービスの可能性）
  - 学会電子ジャーナルをホスト
  - 地域テレビ局・ラジオ局のサーバをホスト
  - 大学新聞発行、地域新聞発行・アーカイブ
  - 町役場のアーカイブ
  - 地域地図アーカイブ
  - もちろん大学の電子資料はすべて大学図書館が管理

京都大学

- 紀要ホスト
- 学会電子ジャーナルのホスト
- 学会ビデオ撮影・公開：図書館→大学OCW→YouTube

日本における学術出版（日本語）

- 日本語論文の発表先
  - 国内学会誌
  - 紀要（一部査読有）
  - 論文集（著書）
  - 商業誌（査読なし）
    - 例「思想」「現代思想」

大半が採算が取れない
ボランティア・ベースの
編集・出版

専任の事務局担当は少ない
大学院生・ODのことも
著作権等制度未整備

世界への流通は
ほとんど無い

<u>周回遅れの「最先端」</u>
商業ベースでない
学術情報流通の一つの姿

IRによる流通支援

課題：学術情報生産・流通コスト最適化

日本ならではの機関リポジトリを目指そう

- 日本語の成果も国際流通経路に乗せられる
- 研究成果の確保：商業ルートに乗っていない部分もカバーできる
- データ・マルチメディア資料と連携した高次利用も視野に入る

図書館の位置付けは？

- 大学の中で、技術的に唯一担当可能な部門
  - メタデータ
  - 情報管理

- 大学の他の部門とは呉越同舟あるいは同床異夢？

研究者との協同

- 多様な研究分野
- 多様なライフスタイル・価値観

- 総合大学ほど難しい
- 工学部と理学部は別の難しさ

研究者

- 激しい異動
- 兼任、客員滞在（数日~数年）
- 共同研究

- 「所属員向けのサービス」は有意味?

出版から流通へ

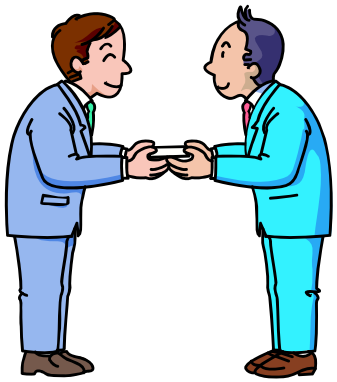
- 紙：→流通センタ→書店→図書館→読者
- 電子ファイル：サーバ→読者

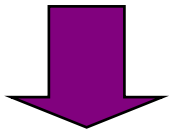
- 表向きには中抜き現象発生
- 裏では「システム」の役割が増大
  - 契約処理
  - 二次情報機能
  - ネットワーク

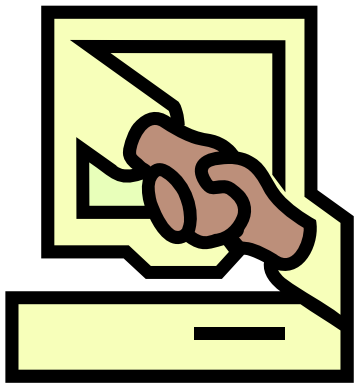
ユーザは無意識
＝インフラのあるべき姿

インフラ整備は目的ではなくて、手段。

「営業」としての研究者







★別刷交換は名刺代わり

- IR＝オンライン営業活動支援

- 研究活動と学術情報
  - 分野による違い:「紙」文化は根強い
  - 個人による違い:情報への関心、技術への関心…

営業活動支援のアイディア

- 流通支援：
  - あちこちのチャンネルで検索に引っ掛かるように
- 名刺本体はだれでも見られるように
  - 本文がなければ無意味
- もらったひとが使えるように
  - 簡単に出版社版にアクセスできる書誌情報
  - 再配布・利用可能なのか許諾条件
- 異動後の利用を簡単に
  - 【固定URLが売り込みポイント】
  - 学内サーバでは持ち運び困難

紀要・学会誌出版者としての研究者

- すでに「営業支援」の観点をもっている。
- オンライン化によるメリットを強調
  - コストダウン：出版・流通
  - 可視性向上
- 機関リポジトリで支援できる内容を伝える

人類の知と専門職の責任

- 新興国・途上国支援
- 軍事転用リスク

- セキュリティでなんとかなるものではない
- 「情報の独り歩き」を覚悟